

TheSTYLE / Fashion & Design

内部に宿る
スーツの美学

「半・分解展」で展示された、1900年ごろフランスで作られたラウンジスーツ。左半分を分解し、芯地の素材やあしらわれ方など内部構造を示した



「半・分解展」での長谷川氏。分解されていない服も並び、触れることが可能。解説つきの展示会は毎回大にぎわいだ

「半・分解展」で展示された、1900年ごろフランスで作られたラウンジスーツ。左半分を分解し、芯地の素材やあしらわれ方など内部構造を示した

スーツは来年で生誕300周年を迎える。英国王チャールズ2世が1666年に衣服改革宣言を発し、貴族に倣約を教える服としてベストを導入。現在のスーツの元祖が生まれた。以後、形は推移するが、上着・中衣・ベスト、下衣・シャツ、タイから成る基本的なスーツのシステムは変えていない。とりわけ18世紀末からはダークカラー一辺倒に向かう。女性服の変化に比べて味で単純に見えるので、男性の偉大なる放棄「説」まで唱えられたことがある。男性が美と装飾を放棄してそれを女性に任せ、男性は機能性に集中したという説で、ジョン・フリーゲルという理学者が1930年代に唱えた。しかし、いったん男性服中の構造を見れば、その説がいかに荒唐なものであるかがわかる。

分解された服から、時代に応じてスーツが担った意味が明らかになる。19世紀初頭の頃は、平面的な作を詰め物によって立体的に構築していた。麻の芯を幾重にも詰め込むことで、胸を張った反り返る体形を作り上げた。新古典主義時代の当時の男性が理想とした古代ギリシャ彫刻のような体形である。実際に着用してみると、人工的な矯正効果によって、肩が後ろへひびき、腰が丸み、胸のラインが生み出される。この極端なシルエットは、ボタンの開閉によって調整できる。ボタンを

1820年ごろ英国で作られたMラチテールコート。ブランドが打ち立てた着こなしのルールと美学は今もスーツに残る



Mラチに作られた襟元は、テーラーの高い技術を示す。長谷川氏提供



この時代のテーラーの技術力を象徴する細部にMラチがある。襟の切り込みが複雑なM字型になっているのだ。いったい何のため？ テーラーが技量を自慢したくて、難しい細部をおさげさせてみせたのではないかと、刺繍の腕を披露するかのようという長谷川氏の解説が説得力をもつ。テーラーが追求していた美や装飾への情熱が表に漏れ出たように感じられる。

1850年代には百貨店の誕生とミシンの発明がスーツを一変させた。ス



2023年、シュタインマイヤー独大統領の晩さん会でのチャールズ英国王夫妻(中央)。燕尾服は燕草で差がついてしまう服でもある＝ゲッチュ共同

1930年代にはドレープカットが誕生する。背中にくちを付けたウエストを作り、動きやすさと優雅さを両立させた。そして現代、快適さと利便性が追求され、日常生活に適応したデザインが主流になった。ジャマのような着心地を醸うスーツまである。一方、テーラーが作るスーツの細部、とりわけ芯地のあしらいに、歴史のなかで育まれた知恵が隠される。「名」を使うことは、モデルの身体をテーラーの理想像に近づけることと長谷川氏は語る。時代に合う美を作ろうとした職人たちの無数の創意と情熱は、継承されている。

スーツは男性が美と装飾を放棄して生まれた地味で退屈な服などではない。内部を見れば、男性がいかに時代に敏感に美意識を更新し続けてきたかわかる。ブランド時代のスーツの名残を残す燕尾服は、現代もフォーマルな場面で着用される。一見、みな同じ黒無地だが、燕草をすりとつけてこそ真価を発揮する。燕草をつける資格のある男性が英のマウンツをとれるというマッパな特権が隠されている。これは、大声では言えないひそやかな魅力としてスーツの長命を支えている。

服飾史家 中野香織
松浦得之撮影